



三省錄

四

9
4077
4



門口9
號4077
卷4



三省録附言上

軒の志乃ふ

志賀



○愚問勅解由次官孝言入る如氷軒長九年三月廿四日卒六十

九才其(中)津の城(中)ては(中)子息(中)甲斐守(中)長政(中)

○神君小志乃が以(中)関(中)原(中)小(中)部(中)の(中)城(中)中(中)人(中)救(中)不(中)足(中)る(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)先(中)づ(中)く(中)

柏(中)ん(中)と(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)觸(中)れ(中)る(中)法(中)派(中)人(中)を(中)考(中)へ(中)る(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)あ(中)る(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)

時(中)日(中)を(中)移(中)す(中)は(中)を(中)勢(中)河(中)川(中)を(中)具(中)原(中)市(中)を(中)橋(中)松(中)原(中)一(中)葉(中)木(中)如(中)氷(中)の(中)下(中)知(中)

小(中)志(中)乃(中)が(中)以(中)て(中)全(中)治(中)を(中)以(中)て(中)廣(中)河(中)小(中)積(中)を(中)池(中)有(中)る(中)法(中)派(中)人(中)小(中)部(中)の(中)也(中)

故(中)く(中)彼(中)數(中)百(中)人(中)の(中)中(中)小(中)二(中)重(中)を(中)全(中)子(中)を(中)法(中)派(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)の(中)何(中)れ(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)

こ(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)告(中)ぐ(中)如(中)氷(中)曰(中)今(中)度(中)者(中)の(中)先(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)の(中)何(中)れ(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)

繪(中)を(中)突(中)ん(中)だ(中)ら(中)ぬ(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)何(中)れ(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)振(中)る(中)を(中)い(中)は(中)り(中)て(中)





夢ゆる小彼活人出陣の用意のほう孫ふならず銘記あり
 あり極る森負小く形多し一ううかき一うき年其費を
 をぬれた金程をせしむるも武用小備んしたるまじ二重金程
 を得たはしりしものあがり費とらなるまじいほどに年費と取捨
 とまんとしりて人費多しつしむる格と覚悟もせしむるまじ
 くと皆との極小感付せしむる 孝高傳記

○石川孫山極極言つてそののぐりの次才を承りておと生得は大名
 道中をぬる小春取荷物と申すも其は度人よりいへば
 板を承り度人と是の弾正殿を引らしたるものたつて春取
 ありと申すや知れぬしりきりきり料理人拾人たりとも供はし
 はまじき人の春袖と申す二十らふの春袖と申す 榮華の極

○不波るる中なる不自由なるがねしりてあはれしむるは
 か格と申すたつてあはれしむるはあはれしむるは格のあはれしむる
 小身よりあはれしむるはあはれしむるはあはれしむるは格のあはれしむる
 大名の子と申すはあはれしむるはあはれしむるは格のあはれしむる
 備じたるはあはれしむるはあはれしむるは 肥後物語

○昭和九年大火のつたは中うちつたはあはれしむるはあはれしむるは
 大火災の節相場ありし

- 一 海島三貫八百又半
- 一 築百六を井
- 一 戸板金を分式板
- 一 古巻三百八拾文

○おしりーのものは、軍勢本意、不持するは、ありき

- 一 おしりーのものは、軍勢本意、不持するは、ありき
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文
- 一 小倉新井 廿百文

全く法物のほうり、中絶ゆること、て、準備をのづら、おぼる
 ぬや、かり、當時法名の、絶ゆる、中、うら、ぬる、勿論、は、
 水藩の、松山、氏、の、安、辰、年、四月、十六、日、今日、廿二、日、より、
 天保元寅年、水府の
 百十九年、
 所、別、者、なる、東、叡、山、中、吉、洋、院、が、江戸、水、戸、に、
 時の、賄、料、法、名、お、絶、ゆる、事、并、に、用、を、あ、
 たる、事、絶、ゆる、事、お、絶、ゆる、事、并、に、用、を、あ、
 こと、武、家、軍、用、の、心、掛、も、兼、ら、る、事、と、
 一 酒、み、味、 幸、年、代、百、拾、文、
 一 豆腐、 七、拾、文、
 一 せん、あ、り、 六、拾、文、

- 一 酒、み、味、 幸、年、代、百、拾、文、
- 一 豆腐、 七、拾、文、
- 一 せん、あ、り、 六、拾、文、

一 ちぢり	二拾把	代八又七ト
一 藪	百拾八	代三又九ト
一 藪	六把	代五拾四又
一 藪	三拾中	代九又五ト
一 藪	百把	代四又六ト
一 里いさ	八俵	代七又
一 うぢ	三拾把	代四拾八又
一 若和布	五把	代四拾又
一 ちぢり	拾把	代三拾又
一 ちぢり	拾把	代七又
一 推草	五俵	代八拾又

一 ちぢり	拾俵	代四拾又
一 かんじ	拾把	代拾七又
一 岩	三俵	代拾又
一 杓把		代拾又
一 うぢ		代拾又
一 松露		代拾又
一 生姜	五俵	代三拾又
一 け	六合	代九又
一 ちぢり	五俵	代七拾又
一 菓子	四俵	代百又
一 ちぢり	六拾俵	代四拾又

- 一 たる粉 代百四拾文
- 一 三挺 代拾六文
- 一 志保 三挺 代九文
- 一 拾挺 代拾四文
- 一 火ばし 三挺 代三拾文
- 一 酒のおす 三挺 代拾五文
- 一 小豆 三挺 代拾四文
- 一 粟 三挺 代拾五文
- 一 三挺 代八文
- 一 三挺 代四文
- 一 三挺 代六文

- 一 庄にあり 代百文
- 一 庖丁人 日雇 代三拾五文
- 但一十八日より十七日まで日三三人

- 一 人員 日雇 代拾四文
- 但十八日一日三人

惣ノ 金部外
 徳金費三百文
 以金をあるより徳金百文拾五文
 但一徳金を分九百四拾八文ノ進帳

酒類附四ヶ坊法多形之書也

大坂河内代百八文
 一 池田 同七拾八文
 一 近江 同七拾八文
 一 越前 同七拾八文
 一 越中 同七拾八文
 一 越後 同七拾八文
 一 出雲 同七拾八文
 一 美濃 同七拾八文
 一 信濃 同七拾八文
 一 上野 同七拾八文
 一 下野 同七拾八文
 一 武蔵 同七拾八文
 一 相模 同七拾八文
 一 伊豆 同七拾八文
 一 伊予 同七拾八文
 一 土佐 同七拾八文
 一 長門 同七拾八文
 一 出羽 同七拾八文
 一 越前 同七拾八文
 一 越中 同七拾八文
 一 越後 同七拾八文
 一 出雲 同七拾八文
 一 美濃 同七拾八文
 一 信濃 同七拾八文
 一 上野 同七拾八文
 一 下野 同七拾八文
 一 武蔵 同七拾八文
 一 相模 同七拾八文
 一 伊豆 同七拾八文
 一 伊予 同七拾八文
 一 土佐 同七拾八文
 一 長門 同七拾八文
 一 出羽 同七拾八文

けんん
 酒類

加 酒類附四ヶ坊法多形之書也

瓶詰樽歩門前南角

小樽各本之書

新諸白本律二付		古酒本律二付	
一 大坂上酒 代百拾四文	一 西上酒 同七拾八文	一 大坂上酒 代百拾四文	一 西上酒 同七拾八文
一 西上酒 同七拾八文	一 伊丹上酒 同七拾八文	一 伊丹西上酒 同八拾八文	一 池田上酒 同百八文
一 伊丹上酒 同七拾八文	一 伊丹上酒 同八拾八文	一 大樽上酒 同百拾八文	一 大樽上酒 同百拾八文
一 山崎本酒 同九拾八文	一 極上味淋酒 同百八文	一 樽 耐 有	

酢類附四ヶ坊法多形之書也

同

一 大坂河内代百八文	一 左京 代百拾四文
一 池田 同七拾八文	一 結城 同百拾八文
一 近江 同七拾八文	一 尾張 同百拾八文
一 越前 同七拾八文	一 山崎 同百拾八文

例自之色平新諸白本律二付
 一 大坂河内代百八文
 一 池田 同七拾八文
 一 近江 同七拾八文
 一 越前 同七拾八文
 一 越中 同七拾八文
 一 越後 同七拾八文
 一 出雲 同七拾八文
 一 美濃 同七拾八文
 一 信濃 同七拾八文
 一 上野 同七拾八文
 一 下野 同七拾八文
 一 武蔵 同七拾八文
 一 相模 同七拾八文
 一 伊豆 同七拾八文
 一 伊予 同七拾八文
 一 土佐 同七拾八文
 一 長門 同七拾八文
 一 出羽 同七拾八文

月 日

六の引九号号好し川の海か記と相りふ小前か記
 一ぬる吉祥院の水戸右より一時的法色の盛徳のうちか
 酒を捧げ拾ふとあつらゑあもする同日拾取又とあつらゑを
 右同時代と知らるる一うらうら安年中の引れおるを
 むららわらるる法色の下巻をまじり上りのとせらるる
 やけりりしゆねははるるがたし

○忠回むらら賢朴のまじりもされぬのつら武備の法やを
 ねも小く趣るるに後代から華素ののぬりな合位年
 善兵を法にほるるをまじりしゆるかたを日この費多し武の
 備ふらるるものなり一昔の法色も下巻なるが小合録か者
 とせもとせらるる軍用のまじりも合録を傍らけら後世もなる

とたの中くたらうらぶなをたまあらず天和三年九月二十
 日水府の備和回平助といふ田舎流居合の名人子細あつら
 返去しけらるる村の刺取結の寫しとせらるるが被さの言
 と百やとめたしとせらるるが

- 一 具足 歩足皮名具 善羽中 七頓 一 因羽織 三ツ
 - 一 渡帳子 善羽中 一 兜 式次
 - 一 旗炮 善羽中 三挺 一幕 六張
 - 一 鞍 善羽中 一口 一腰 四
- 右い外より小舟のなるる手帳押急る具ありれををら巻
 旗長物軍配扇子希 軍中用具ありたびらるるあり四巻
 才一系るる走小舟結き足ありたのまじりしゆるかたの

去りしやの由りおぼしむるに合三定なりしとて由きや
糶三拾を儀四年之辨入 今又拾を儀九萬九百三拾人
加多道を教知しはりしや今時三百之位の武士は
去定も同よりいづらぬしはりし事をもたねりしや
る

○ぬ六年もいふより法住人の身よをわたりしとて
去定も糶三拾を儀も去りし中知り又百之位なりし
中糶しや去りし糶三拾を儀も去りし中知り又百之位なりし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
侍の言もいふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし

その時代の世話を侍らるるもの及びぬ近も武士のいふに
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
あつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし

○忠曰はるる人の中より赤野先祖大坂の陣の由供せしものたのむが
去時の中法を用を記しはるる中法を用を記しはるる
ぬ文とあつていふにぬ平の口上しおまの糶三拾を儀も去りし
るる中法を用を記しはるる中法を用を記しはるる
るる中法を用を記しはるる中法を用を記しはるる
るる中法を用を記しはるる中法を用を記しはるる

横濱に病室をもちて安んずるやいつか余ありしときついでに後世
 のついでに世の事あるが如きやわづらひしこといふ所の事
 かなかりきとぞ思はれしなり

○東鑑の治承四年の日記に実録しき中か

- 一 炭を結代百歳
- 一 薪を結代百歳
- 一 壺を末女拾遺
- 一 糠を俵に拾遺とありて是をいふ参考の事なり

○余津丸中將保科正之君は右智の傷居小捷と云ふ事あり其方かた
 何ぞ出づるやと云ふ事あり若く才一貧に生れしもの故なり
 一 余あり今むしりて返りし上るや云後度今一河を
 為すありと答へたるに大なる事ありと云ふこと大なる
 河原にありと云ふ事あり

○宿務海軍右大臣実朝朝長孫和郷の怪談と云ひ新井の支那

の為時山小僧たりと答合たり

とも志しりておもて得たりかづきの岩より山小僧と云ふ事
 と是より志たり小僧の事ありと云ふ事あり大船を作らしむ
 志あり小僧の好む事ありと云ふ事あり小僧の好む事あり
 昔の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 しむ海軍の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 志ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 小僧さんといふ新井の事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 民を答へる事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

志のうら老女小中守の暇日中後とて彈正不念とていふ一且
 何やと云ふ入る有是暇、地思致しとれと指中つりつりつり
 知つてしと指おれり下れを森木濡りやありと云々おれり
 ち指をさ方の存是もよりつりつり考らんを此夜の儉約と云
 中の上中あふ千人物立所の民中とて述下不使、存とつりつり
 指の有緒を致しと云々指を中とて度存念より記つりつり
 人指を以度存中つり肝要と指おれり女と指入る指と云々
 何れも指をさすもおれり指とて不存、必を指おれり不中付ら
 先祖、指しと云々天下後世おれり指しと云々莫大の恥
 辱とて是と云々おれの恥とておれり指しと云々不若く有とて老女と云
 竹彈正一旦指入る指おれり指しと云々指しと云々指しと云々

女を介つかき勢とて 永日抄

○玄惠法師が在河内修業、白紙拂度とて西園復古也、文非燈燭
 之教とてとて文章余情とてとて、実りつりつりつりつり
 書をこねめひつりつり、小頃日永亭とてとて、以指禁中日記小
 復古用とてとてつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 ちあつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 用ひぬし、先進の礼樂とてとて、指入るつりつりつりつり
 指考つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 指書の内容とてとてつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 指多指とてとて指多指とてとて、今指切つりつりつりつり
 指多指とてとて指多指とてとて、今指切つりつりつりつり
 指多指とてとて指多指とてとて、今指切つりつりつりつり

かい付竹

○大寺の所持をばをくわゆる年十は秋晴形、自の老中がの
何きも出持の上を毛織をくわゆる着嫁形をばをらげおたすまで
大酒盛るる香所中丸を以側前、上使くわゆるいづもは持の上を
於て月をばをくわゆる、上園小寺くわゆる依りて香を以側前を
この、上言有るるくわゆる今どはの耳より承りて信くわゆる
ぬまもはくわゆるもたうなるのこ、落穂集

○江戸城言初は普清のくわゆる武蔵浦和者

神君玉蔭、以て遷居をばをくわゆる云々、今將りの位僧か、れぬく
くわゆる玉蔭坊くわゆる中、時結着くわゆるのくわゆる

許君金子くわゆるは、借用品をばをくわゆる以、墨附所判物取持、はくわゆる

今ま沢たりくわゆる中、傳はくわゆる張くわゆるおとらの出や、武蔵くわゆる志のくわゆる
上代すくわゆるあつて、くわゆるくわゆるくわゆるも、くわゆる名物のくわゆる日本、の今記、
くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
番城くわゆる中、開演のくわゆる夏、実ん坊のくわゆるお、え記、くわゆる落穂集考

○古老曰々の並本、

大敵とのすえ、まて、松のくわゆる木、くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
おく、は、あ、くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
ほく、くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
を、憲、公、又、昭、公、の、中、代、は、針、匠、の、才、子、元、某、去、方、丹、は、ち、最、老、役、
勤、を、くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
大敵、公、の、中、代、の、後、す、で、は、浪、弟、雷、神、門、の、立、を、くわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆるくわゆる
附上十四

本多信房もあまたの合はれをうけたりとて、
大場庵に中へおれり、次の女中も多し、
きついで、
あまのの様子をよきく、
かきつゝ、
おと人の中へ、
ゆるい、
上極の乳をよげ、
くたゝぬ人との寄、
お人の、
おのひ、

○
ゆるい、
上極の乳をよげ、
くたゝぬ人との寄、
お人の、
おのひ、

○
ゆるい、
上極の乳をよげ、
くたゝぬ人との寄、
お人の、
おのひ、

○原君家の歳のをあとの既破損小及びなきに、
加々丸、
鳥巢小説

せんし

源君あ、
おのひ、
かきつゝ、
おと人の中へ、
ゆるい、
上極の乳をよげ、
くたゝぬ人との寄、
お人の、
おのひ、

酒君武士の三我峯の用小立を考へて...
ら我がわらむ...
と海軍を志す...
か堂の激川を渡り...
酷暑の凄んや...
傲ぶはとわ...
武將感状記

○人小物をおく...
のを送る...
か種餅餅...
何き又菓子...
人小実ある...
人小送る...

よも人への心...
先くみづら...
家道訓

○青砥...
求を...
物...
尊...
印...
を...

と云はれ織田氏のおびきつらひ一帯の火を焚くこと
何れも古代の有様とひかへるべし

○何れも秀吉曰病成治する三味の妙業

天をむとま 成を治す 俵成さる

禁拘四味

私をかり 物欲をたひ 拘小意を 非義をけり

右四味をきつる三味を用せしむ病けむ

○お川筋、お鷹野、成らむらむら鷹野を人々を連ねて鷹野を如
く家々の裏人々知りふすは柳林を柳政之お小川の
まは法度のお鷹場を鷹あを傍らかこは不承りの由
かま作らむこれ有るらむ鷹野を柳政之お小川の

鷹野一伝くも鷹野を成らむ鷹野の柳野口作のまは鷹野の
先大勢をよき番人お鷹野を成らむ鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野右番人をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野一帯の鷹野をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野一帯の鷹野をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の

寛永小説

○津組の伝小鷹野作のまは鷹野の柳野口作のまは鷹野の
先大勢をよき番人お鷹野を成らむ鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野右番人をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野一帯の鷹野をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の
鷹捕まの鷹野一帯の鷹野をいひ鷹野一帯の鷹野を柳政之お小川の

爽ふおのり掛ふる志次感ト昂座一倍の加恩あつぬ為
時山侯甲斐守り森中の振を志をのり振梅とて月照
のこた言敷やならすトあつぬ一が森能ホ華一を
金とていふのうも是よりちう大才一とて一を志次
武官のいけいといふにうもい掃部政印戸を志とて
か高野正正の烟ま日光上洛すまの志の志なるか
か志とて志をいふ武野燭談

○むらうのうの志次志次稀なる使はるる事
女中も大いなり女使はるる用なり口はるる海ふりし事
志次志次はるる年口はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事

○中橋小舟茶はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
神志志のいふ海あつぬとて次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事

志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事
志次志次はるる事志次志次はるる事志次志次はるる事

○本意固當ち亦後朝長昇身一侍俊小任く一笠の君小
 村ぞしきまふ時の影さし形奔走く一門の市成おつる
 朝らりし若俊か一いよ一徳有人たりのとど毎日朝
 會のち婦人命ト一莫索三碗り必婦人共おどま
 婦人今言妻たりのとど首日たつたきくたどむくこ
 とく目一教誡あらざる若問小鏡の枝又禱さく一
 ち押一惣進する三本入の扇子翁より一あつて一法
 々々松一一人の回さく一いほ一あり一と一た舞意の
 々々々々一一の以用意あらざる三本入の扇子翁を二條
 家の家上持来一と映結るをた乳術成速んとおりの
 中教書り一扇子を買んとする小懐中一と括注りち合

ふせいせいで買ねんやとさかびひやと我知りたるや
 汝は不及一扇子いかな程もは用立をん一持おら
 びとた実束の威光かきも一いほ一あり一と一た舞意の
 の如く言さく一ぬ一鏡の扇のこいも一いほ一あり一と一た舞意の
 舞ののるんとおりのとちいふやとあつたおのちいふ
 とむら自家の念もいほ一と一た舞意の
 まがた一と一掛さく一と一た舞意の
 ○所詮本の亦東むの一長を一も一も一侍先の腰を
 凡侍の侍同志より合中らりの中らりちち合意の
 する家侍の意外を合中らりの中らりちち合意の
 公あはれ一のこいせいの竹履成なる用の一を一侍

中るうらよじつら吐を波す解を好むがむ記し中るる極
寧ろも緝の本海ありきまの思ろ、尾のあつ、鶴のあつ、
まぶし、依をまろるまなり、古者物語

○後日本紀第四元明天皇四十四代和銅四年の文をよる小瀬を文
小栗穀六升とあり、省任、出石七升六升あり、後のもつた
出や、わたりなり、食をふ百粒、あつ、はやく、あつ、食、
と、ま、なり、有、伯、く、る、元、有、南、嶺、子

○水府黄門義公の治をよる
く、る、武、を、用、意、収、米、を、あ、ま、ま、む、む、の、も、ろ、ひ、藤、を、好、ま、む
き、用、の、費、を、あ、ま、ま、む、正、徳、の、徳、約、を、す、ま、ま、む、ん、や、れ、は、方
し、只、く、る、ま、は、思、く、く、不、自、出、す、る、あ、つ、と、依、あ、つ、と、

夏、日、か、た、ら、い、く、小、す、り、ま、ま、む、む、な、く、び、く、く、ま、の、り、る、ま、と、ま、な、ま、
実、ま、つ、く、く、く、小、教、戒、あ、つ、や

○小條言、時、高、命、あ、や、酒、九、献、者、も、九、種、く、と、楠、山、を、あ、ま、ま、む、
く、は、為、漸、久、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、あ、ま、か、ん、有、ま、ま、や、反、古、代、の、質、朴、お、り、い、あ、る、ま、ま、
今、の、代、の、下、の、酒、あ、ま、酒、九、献、者、九、種、な、ま、ま、か、ん、
あ、あ、ろ、ず、く、く、時、の、天、下、の、執、権、し、その、時、代、を、松、下、孫、尼、の
隣、子、の、切、法、最、明、く、時、於、の、下、洗、子、の、酒、味、香、の、ま、ま、な
ま、破、れ、あ、つ、り、十、錢、を、尋、求、を、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
種、く、く、大、好、く、く、有、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
村、ま、る、水、身、の、箸、を、造、り、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
母、三、三、三、三

嬉らんとし同譚たりと

○磯碓の定行院科に地有り遠修を信せし井伊巨大修院

多き井志海より石板倉伊賀守之持をお守りし
此の地は磯碓の地也 磯河土産

○樽匠探録府に所産を記す其内若元が合

府産角力かちねる所と風を記す此の地は
休役の地と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此中一書一書同上

○家をおさむる小町の教あり一子に家業とす法やきて生業

おとむる二子の檢約あり財用を足す三子あり
此をより口子を惣ありて人と愛すこれ五子ありて家道訓

○家のより教あり一子に家業とす法やきて生業

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

此の地は角力かちねる所と記す此の地は相撲の地と記す

